

書評：宋基燦『「語られないもの」としての朝鮮学校 —在日民族教育とアイデンティティ・ポリティクス—』

日本学術振興会特別研究員・一橋大学大学院博士後期課程 永山 聡 子

1. はじめに

朝鮮学校は、日本社会に存在する教育機関にも関わらず、教育課程・教育実践の内容やそれらに基づいた効果等を論じた研究は多いとは言えない¹⁾。その一方で、在日本朝鮮人総聯合会（以下「総聯」）と朝鮮民主主義人民共和国との関係から論じ、政治的文脈を落としどころにする研究蓄積は少なくない。もちろん政治的文脈から問いを立てることに意義が無いわけでない。しかし、上記のように「政治化」された固有のイメージ形成が確立したことで、捨象されてきた部分が多々あると考えられ、この点を見逃すことはできない。その一つが、本書において一貫して追求されている、在日コリアン²⁾の「実践共同体としての朝鮮学校」の側面である（p.205）。これらを含め、朝鮮学校の教育実践とそこを生きる生徒たちを研究・分析することは、既存の研究では掬い上げられにくかった「生徒たちにとっての朝鮮学校」の意味を探る作業となる。

以上のように、固有のイメージが形成され続ける中ではあるが³⁾、ここ数年、朝鮮学校の語られ方に新しい動きが見え始めている。本書はこのような動きを牽引する作品と言える。

2. 本書の特徴—構成と概要から—

■本書の特徴

本書は、大韓民国で生を受けた「韓国籍」の研究者⁴⁾が、朝鮮学校の調査・分析をもとに書き上げた博士論文（京都大学）⁵⁾に、加筆・修正を加えたものである。著者は本書の冒頭から、一連の研究過程にて、「韓国人」研究者が朝鮮学校を研究対象としフィールドワーク（調査）を遂行することの困難さについて、エピソードを交えて記述している。その具体的な内容については紙幅の関係上

触れることができないが、そのような状況の中、37カ月間朝鮮学校でフィールドワークを行い、学術研究に落とし込んだことは画期的であり、意義のあるものだと言える。

■本書の構成と概要

本書は「朝鮮学校に関するプロパガンダでもなく、無条件の批判でもない、朝鮮学校のありのままの姿を肯定する新しい視角を発見すること」を目的としている。

プロローグ・序章・第1章は、「方法としての朝鮮学校」を検討するために用意された章である。プロローグは、著者の言うところの「語れない」意味を丁寧に説明し、ある程度読者を「記憶の共同体」へ誘う道具を準備している。そして、「語れない」ものとしての存在が、言語の不整合性に起因するものではなく、矛盾だらけの「人間」の問題であり、人と人、集団間の関係性の中に、埋め込まれた構造的な問題であることを指摘する。この構造の屋台骨が、朝鮮の植民地化であることは言うまでもない。この言及があることで、本書での「記憶の共同体」が「植民地化された歴史」であることが理解できる⁶⁾。

序章は、本書の理論枠組みである省察的人類学⁷⁾の検討である。特にソニア・リヤンの研究（1997）は、同じ朝鮮学校を対象とし、省察的人類学を試みた先行研究として批判的検討を行っている。ソニア・リヤンは、イギリスで修め、アメリカで学究生活を送っているが、かつて総聯系在日コリアンの核心的メンバーであった。リヤン（1997）はその自分が、在日コリアンの世界を批判的に捉えることで、省察的人類学研究が達成されたとする。しかしリヤンの研究について、著者は、研究対象における「客観」と「主観」の領域までも、研究者としての特権を使用しているため、省察性に欠けると指摘する（p.8）。一方で著者は、

研究者自身が、韓国社会で身につけた認識枠組みを相対化することに焦点を絞り、朝鮮学校を研究することで、省察的人類学を試みる。そして、著者がたどり着いた答えは、在日コリアンを他者化せず、さらに「記憶の共同体」に浸かり過ぎず朝鮮学校を描くことである。本書は、「大韓民国」という1948年に誕生した共同体で生きた「韓国人」である著者が、「記憶の共同体」を共有できるのかを試みたものとも言える。

第1章は、在日コリアンが、朝鮮人であることを拒否したり、積極的に受け入れたり、自己を「語れない」ことについて、いくつかの事例から構造的な問題であることを描き出す⁸⁾。この構造は、朝鮮人が、植民地支配を通じて「他者」として発見されたこと、常に抑圧され、従属的に位置づけられることを余儀なくされた歴史に起因するとしている。

第2章は、分離主義的教育空間について、植民地支配後の日本社会における歴史的経緯が原因であるとする。具体的には、日本政府・GHQ・日本共産党の「日本の民族主義に基づいた人種主義と北朝鮮の民族主義に基づいた社会主義による『意図せざる合作』」(p.146)であったとする⁹⁾。加えて、民族を実践して行く場としての朝鮮学校の具体的な教育内容として、公式的教育課程¹⁰⁾を示しながら、生徒たちの実践を捉えようと試みる。在日コリアンの状況を相対化を試みる意図として、「帰化者」「韓国からの転校生」「中国朝鮮族」の生徒インタビューも合わせて分析する。朝鮮学校は、統一したカリキュラム¹¹⁾であることを確認する。さらに、カリキュラムの狙いは、ある種の「国民教育」を浸透させることであり、生徒らに共通した経験を提供することにある。その結果、朝鮮学校は、ひとつの「経験の共同体」になると指摘する (p.198)。

第3章は、本書の核となる「実践共同体としての朝鮮学校」分析である。つまり経験や理念だけでなく、朝鮮学校で織り成される様々な実践¹²⁾が重要であることを明らかにする。著者によれば、朝鮮学校の教育課程の特徴は、分離主義・集団主義・パフォーマンスだという。分離主義で成立する学校空間は、朝鮮学校の文化を決定し、これらは、在日コリアンの「日本社会の中で民族を守る」

(p.214) という危機意識が支えているとする。

パフォーマンスについては、二つの言語実践から捉えている。生徒は朝鮮学校に通うことで、朝鮮語を演技領域(二次言語の世界)、日本語を実生活の領域(母語の世界)という二つの世界を往来することになる。日本語・朝鮮語ともに、生徒たちにとって、「非常口」として機能していることを指摘する。日本語の場合は、朝鮮学校における集団主義の抑圧に対する抵抗であり、朝鮮語の場合は、日本社会における日本人に対する「悪口」や「悪評」を言わざるを得ない時に使用することを指摘する。また、朝鮮学校において朝鮮語は公的領域での使用のため、本質的に「演劇的」(パフォーマンス)であることを指摘する。そして、公的領域(朝鮮語)と私的領域(日本語)によって構成される多重的状況のなかで、アイデンティティを管理していく道具の一部として「朝鮮語」を捉えている。

3. 本書の貢献

■アイデンティティ・マネジメントの場としての朝鮮学校

第一の貢献は、今なお日本社会の政治状況によって、教育実践の評価が左右されてしまう朝鮮学校に対して、研究対象として客体的にとりあげ、分析・考察を行ったことである。著者は、「朝鮮学校における、集団主義と個人主義の共存や本質主義に基づいた国家主義言説と脱国家・民族主義的实践の共存のような、一見矛盾しているように見える諸要素が、実は演劇性と二重的言語実践による二重的現実認識に上手く統合されている」(p.228)ことを指摘する。すなわち朝鮮学校や、アイデンティティを本質的に捉えることなく、この世を渡っていく「主体のアイデンティティ・マネジメント」の場として捉えている (p.229)。この指摘は、朝鮮学校研究のみならず、広くポストコロニアル研究への貢献として位置づけられる。

また、朝鮮学校の教育実践を通して、近代社会が考察し続けてきた「学校教育」とは何かという問いを導き出し、それらに対して一定の答えを出している点も付言しておかなければならない。著者は学校教育の役割について、抑圧として捉える

でもなく、主体的な人間形成の場として捉えるだけでなく、生徒自身の置かれている状況を相対化する場として、生徒自身が今後の人生を生きるための知恵を獲得する場として捉えており、これは非常に興味深い。

■研究者と調査対象者の関係を再考

第二の貢献は、著者自身が方法として機能しているところである。これは、長い間人類学が挑戦し続けた研究スタイルであるため、斬新なことではない。しかし、本書が一般的な人類学的研究と違いがあるとすれば、人類学者と対象との間に植民地主義的権力関係が存在しないことである。今なお、一般的な人類学の研究においては、制度／非制度的な状況に関わらず、宗主国側（研究者）の「興味と探究」に植民地側が「対象」となっている。本書は、人類学者も対象も植民地支配を受けた側である。さらに、双方ともに制度として「解放」された今でも、旧宗主国側の文化的・構造的支配を直接的・間接的に受けている中での研究者－対象関係と言える。批判を省みず言えば、本書は、研究者・対象の双方とも、連続する構造的支配の中で、「語れない」ことを「語ろう」としている状況を編み上げているのではないだろうか。

最後に、朝鮮学校に関して多くの人々が抱いている「空想」と「幻想」について、教育実践と具体的なカリキュラムを示しながら、答えを与えたことは有意義であることを加えよう。これらの意義を確認した上で、国家と人を同一視している日本社会の単眼的な見方を批判する本書から学ぶべきことは少なくない。しかし課題がないわけでもない。

4. 残された課題

第一の課題は、「二重の現実認識構造」の妥当性についてである。著者はゴフマン（1959）の自我の二重性を引きながら、朝鮮学校の生徒たちを考察する。生徒たちは、朝鮮学校の門をくぐった瞬間から「演技的」（p.217）になり、公的自我と私的自我が分裂するとしている。しかし、この状況は、朝鮮学校特有の問題ではなく、むしろ広く「学校」の特性として捉えることができるのではないか。つまり、どの学校であれ生徒たちは、ほぼ毎日公

的空間（学校）と私的空間（家庭）の間を往来する。そして、意識無意識を問わず、公的空間に適応する身体を生成し続けている。その一貫として学校に身体を「合わせる」ために、多少の演技的要素が必要となると考える。もちろん、公的空間と私的空間に差があればあるほど「演技」が必要になるため、本書が捉えている空間の往来は重要な指摘であることは間違いない。そのことを踏まえた上で、「二重の現実認識構造」について広く一般的な「学校」という場が持つ特性と朝鮮学校が持つ特性の相違について言及が欲しい。

第二の課題は、「朝鮮学校のありのままの姿」が明らかにされたのか、についてである。本書が朝鮮学校の教育課程の特徴や、生徒たちの言語実践を部分的にであれ捉えたことは確かであろう。しかしこれは、朝鮮学校を捉えるというよりも、著者が韓国で培ってきた認識枠組みからくる「理解できないこと」について「理解しよう」とする試みのように思えてしまう。もちろん、そのことは目的の一つであるため、言うまでもなく大変重要である。しかし、「理解しよう」とするあまり、朝鮮学校を分析するというよりも、在日コリアン全体の問題を、一足飛びに敷衍して分析している箇所が散見される。例えば「通名使用」についての言及などは、広く在日コリアンに共有されている問題意識であろう。朝鮮学校の生徒だけがこのような状況に置かれているわけでもないはずである。もちろん朝鮮学校について、在日コリアンの文脈と切り離して考えることは不可能である。だが、不可分であることをある程度認識した上で、朝鮮学校の独自性をもう少し記述してもらいたい。

第三の課題は、日本社会で朝鮮学校がどのように位置づけられてきたのか、語られてきたのか、それらの考察の乏しさである。日本社会において、在日コリアンは、程度の差はあれ「厳しい状況」にその身を置いている。さらに、その中でも朝鮮学校通学者・経験者は、日本社会が描き続ける、必ずしも事実とは言えない「朝鮮半島の情勢像」の影響を受けざるを得ない。生徒たちの置かれている状況が、日本社会との関係性にあるとしている以上、これらへの言及は必要な作業と言える。もちろん、これらに引っ張られすぎることには避けたいが、少なくとも、著者が調査した時期の

日本における朝鮮学校の社会的な位置づけや、あるいはその特徴に関する言及は重要であろう。

5. 評者の背後にあるもの

評者の背景に関する説明は最低限に留めるべきだと思いつつ、敢えて最後に記述することにしよう¹³⁾。評者は、直接的に朝鮮学校や在日コリアン研究を学術的に専攻しているわけではない¹⁴⁾。しかし、本書が取り組んでいる方法としての「省察的人類学」に共感し、構築主義的民族主義を理解する立場を共有している。そして、何よりも、評者自身が境界を往来する存在である¹⁵⁾。時には揺るがない在日コリアン3世であり、時には「記憶の共同体」に深く入り込めない「日本国籍」保持者であり、時にはその現状さえも「客観視」してしまう学究者である。従って著者が述べる「言語障害」を経験している。経験しているからこそ、「語れない」ことを語る研究者にならなくてはいけない。今後どのような「振舞い」が求められるのか、どのような時代を模索すべきか、そのことを考えさせられる作品であることを添えて本書の書評を終わることとしたい。

註

- 1) 朝鮮学校の教育現場に対する実証的研究として発表されたものは、ソニア・リヤンの研究が代表的である。その他には、朴三石(1997)、金徳龍(1998)、洪晟云(2002)、柳美佐(2009)、呉永鎬(2010,2012)、曹慶鎬(2012)などがある。著者はその限界として、「大部分が朝鮮学校の教員、朝鮮学校と直接関係がある人々」(p.36)によるものであると指摘している。そのような中、藤井幸之助(2010)、仲潔/橋本純(2009)、中島智子(2011)などの研究も登場しているが、いずれも二次資料や保護者研究などにとどまっている(p.36)。
- 2) 日本社会在住の朝鮮半島出身の呼称は様々ある。本書評では本書の記載に従い全ての記載を「在日コリアン」とする。従って評者の考案ではない。
- 3) このイメージ形成の生成過程は、歴史的経緯だけに留まらず、近年のめまぐるしく変わる日朝関係・日韓関係が影響している。
- 4) 漢陽大学大学院文化人類学科博士前期課程修了(文学修士・韓国)、京都大学大学院文学研究科博士後期課程社会学専攻(文学博士)現在、大谷大学社会学部助教、専攻は社会人類学。
- 5) 2009年11月提出。
- 6) また「植民地体験の連続性と日本・韓国・北朝鮮の国民国家イデオロギーの狭間で重層的抑圧の下に置かれている在日コリアンの現状としての「サバルタン性」に注目」しながら論を進めている(p.54)。
- 7) 人類学の省察性は「1970年代以降に現れたブルデューやレイヴ/ウェンガーらの実践理論を批判的に検討しながら、コミュニティが多様な権力作用のなかで形成されることに注目」している。(田辺2002)
- 8) 特に「隠れ朝鮮人」という在日コリアン特有の状況に触れ、『隠れること』は、民族的劣等感がもたらしたとても受動的で個人的な行為であり、現象としての『隠れ朝鮮人』はエスニック・マイノリティに対する日本社会の態度があらわれ、日本社会の構造的問題だとしている(p.38)。
- 9) ここでは、左派と右派両側であることを指摘する(p.146)。
- 10) 北海道から九州まで全国にあるすべての朝鮮学校は総聯本部の教育局によって管理される中央集権的な教育体系の中に位置づけられる(p.154)。基本的には日本社会のそれと相違ないと言える。
- 11) 統一された教育理念と自主製作した共通教科書の使用、自力で養成した教員と彼らの信念、チマチョゴリの日常的区分の実践、北朝鮮との関係によって構成されている(p.198)。
- 12) 朝鮮学校の朝鮮語教育は、体系的な言語授業を通じてのみ行われるのではなく、授業外の日常的な実践と参加によって達成される。「ジジョクサオプ(指摘事業)」が特徴である。これは、日本語の授業以外の全ての言語実践を朝鮮語で行うように強制するものである(p.206)。著者は、この制度を日本の「植民地支配の末期に朝鮮の「国民学校」で行われていた「国語常用運動」を思わせる(p.206)」と指摘するが、ここには少々違和感を覚える。むしろ批判がないわけではない。しかし、失ったものを構築する朝鮮学校の言語実践と、植民地化の支配実践としての言語の塗り変えは、全く意味合いが異なる。何よりも、著者は、日本語圏(旧宗主国)を生きながら、朝鮮語(旧植民地として認識されている)を身につける困難さを理解していないのではないだろうか。
- 13) 冒頭に述べるべきかどうか最終段階まで迷った。それは、評者の立ち位置を表明することで、本書評が単なる「記憶の共同体」成員の共感性だけで成立しているのではないかと判断されることへの迷いである。実はこの迷いこそが、在日コリアンの置かれている状況とも言えるのである。
- 14) 専門は社会学であり、専攻はフィールドワークを中心とした医療社会学・歴史社会学である。

15) 朝鮮学校通学経験はなく、朝鮮語圏の語学は、10代後半から語学学校・大学等で習い、現在も勉強中であり、この先も一生習得を続けなくてはならない「外国語」である。そのために朝鮮学校の生徒ほど二つの世界を往来していない。しかし、日常の中に「朝鮮」なるものが広がり、行事等は朝鮮式（厳密に言えば在日コリアン式であろう）である。

参考文献

Erving Goffman 1959. *The Presentation of Self in Everyday Life*, (=石黒毅訳 (1974) 『行為と演技——日常生活における自己呈示』誠信書房)。

呉永鎬 (2012) 「朝鮮学校の教育の成立過程に関する教育的研究—その理念、内容、場の検討から—」、『〈教育と社会〉研究』第22号、pp.29～37。

——— (2010) 「民族教育体制再確立期における朝鮮学校自然科学教育の成立と展開」東京学芸大学大学院 教育学研究科理科教育専攻 理科教育コース 修士論文。

喜多加実代 (2009) 「語る／語ることのできない当事者と言説における主体の位置」、『現代社会学理論研究』第3号、pp.111～123。

姜徹 (2010) 「足立から見た在日コリアン形成史—濟州島・東京足立に生きた私の半世紀」、雄山閣。

金徳龍 (1998) 「50年代前半期における在日朝鮮人民族教育の一考察—公立学校・分校、民族学級を中心に」、『朝鮮大学校学報』第3号、pp.115～131。

Ryang Sonia. 1997. *North Koreans in Japan: Language, Ideology, and Identity*. Boulder, Colorado: Westview Press.

ソニア・リャン (2005) 『コリアン・ディアスポラ』明石書店。

田辺繁治 (2008) 「コミュニティを想像する: 人類学的省察」、『文化人類学』第73号 (3)、pp.289～308。

曹慶鎬 (2012) 「在日朝鮮人コミュニティにおける朝鮮学校の役割についての考察—朝鮮学校在学生を対象としたインタビュー調査を通じて」、『移民政策研究』第40号、pp.114～127。

仲潔／橋本純 (2009) 「民族アイデンティティと学校教育: 朝鮮学校の教育実践から日本の言語教育が学ぶこと」、『岐阜大学教育学部研究報告人文科学』第57号 (2)、pp.175～184。

中島智子 (2011) 「朝鮮学校保護者の学校選択理由: 『安心できる居場所』『当たり前』をもとめて」、『プール学院大学研究紀要』第51号、pp.189～202。

西川長夫 (2006) 「<新>植民地主義論—グローバル化時代の植民地主義を問う—」、平凡社。

朴三石 (1997) 『日本のなかの朝鮮学校』朝鮮青年社。

——— (2012) 『知っていますか、朝鮮学校 (岩波ブツ

レット)』岩波書店。

藤井幸之助 (2010) 「多言語社会ニッポン朝鮮語=韓国語 (11) いつまで朝鮮学校を認めないのか? : 在日朝鮮人の子どもが朝鮮語=韓国語を継承するための大切な場所」、『ことばと社会: 多言語社会研究』第12号、pp.236～248。

洪晟云 (2002) 「朝鮮学校生徒のエスニック・アイデンティティの一考察」、『言語コミュニケーション研究』第2号、pp.84～98。

柳美佐 (2009) 「在日朝鮮学校における小学1年生へのL2朝鮮語指導の特徴」、『母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研』第5号、pp.22～41。